九月十八日をながつきのとをかやうかといへり、とをかあまりやうかといふべきを、はぶきていへるはいかゞなれども、上のかをはぶかざるは、さすがにいにしへなり、今の人、上のかをいはずして、とをあまりやうかとやうにかくは、古の例にたがへり、

〔源順集〕初の冬庚申の夜、伊勢のいつきの宮にさぶらひて、松の聲よるのことにいるといふ題にて、奉る歌の序、いせのいつきの宮、秋野の宮にわたり給ひて後、冬の山風さむくなりての初、はつか。七日の夜。庚申にあたれり、○下略

〔新撰字鏡〕日。曦。扶菊反、晦也、豆支己毛利、

〔釋名一釋天〕晦灰也、火死爲灰、月光盡似之也、

〔月令廣義三月〕三十日、晦日、月盡無光也

〔類聚名義抄二日〕晦音悔ツゴモリ

〔運歩色葉集津〕晦日ツゴモリ死灰也、

〔書言字考節用集二時候〕晦日、提月、同又云晦日、公羊傳、月晦日也、三十日、晦日、同

〔改正月令博物筌十二月〕大年おほとし大晦日、年のはてゆへ、大の字をそゆるなるべし、

〔東雅一天文〕日ヒ　晦日をツゴモリといふは月隱也、古語にコモルといひしは隱の義也、此夜月晦なればかくいひし也、

〔倭訓栞前編十六都〕つごもり　晦をいふ、靈異記に見ゆ、月隱るの義、新撰字鏡につきごもりとよめり、日本紀に、月盡をよめり、つもごりといふはあし、阿波にてこもりといふは略せしなり、津輕にて十二月小なれば、翌朔日を大晦日とし、正月二日を元日とす、是を津輕の私大といへり、

〔物類稱呼一天地〕晦日つごもり、阿波の國にてこもりといふ、

〔梅園日記一〕晦日掃。　今の世に晦日掃とて、毎月の晦日に、家内を掃除するものあり、是は久しき